

鮭 鱒 報 載

第 五 十 九 号

北海道鮭鱒増殖漁業協同組合

目 次

咫 尺 記	半田芳男(一)
若令親魚の交配について	武田重秀(八)
銀毛ヤマベの飼育放流を提唱す	半田芳男(一〇)
鮭鱒孵化場の疎開を提唱す	広田源造(三)
孵化場の想い出あれこれ	谷口達三(三)
故水沢一郎君を憶う	半田芳男(三)
鮭 報	(三)

役員名簿

(三七・五・二〇選任)

組合長理事	半田芳男	(札幌)	理事	中陳勇	(羅白)
副組合長理事	植松	(標津)	同	奥田惣兵衛	(浦河)
同	藤枝義見	(斜里)	同	石田露松	(増毛)
専務理事	新妻壬子夫	(札幌)	同	三国謙蔵	(雄武)
常務理事	佐々木繁太郎	(標津)	同	東二郎	(天塩)
同	堺哲弥	(大津)	同	八木勝夫	(浦幌)
同	三好竹勇	(白老)	同	吉田繁雄	(石狩)
同	相原重治	(石狩)	同	尾崎万慶	(釧路)
同	奥谷悠一	(網走)	同	天野佐市	(枝幸)
理事	白井茂	(網走)	同	石塚正之	(稚内)
同	古屋憲吉	(紋別)	同	市川春政	(猿払)
同	大館三郎	(湧別)	同	竹田盛爾	(厚田)
同	新谷広治	(常呂)	監事(代表)	新保又四郎	(白糠)
同	本村幸一	(標津)	同	赤木寅一	(斜里)
同	道又茂吉	(別海)	同	大坂岩吉	(大津)
同	安部兵吾	(羅白)	同		

咫尺記

半田芳男

昨三十六年五月二十四日支笏湖畔モーラップ山麓において行なわれた第十二回国土緑化大会に御臨席遊ばされた天皇、皇后両陛下は植樹の行事を終えられて後道内各所に御巡幸相成つたが天皇陛下は翌二十五日午後三時過に御宿所札幌グランドホテルにおいて本道の開拓、産業の功労者として下田喜久三、鈴木良吉、半田芳男、森下友平、逢坂信恵(御進講順による)等を御召になり各々からその専門とする事柄についての御説明を御聴きになられたがその中の一人として半田芳男は北海道鮭鱒増殖漁業協同組合長として北海道鮭鱒孵化事業について御進講申し上げるの光榮に浴した。この日天皇陛下の前方僅か三メートル位極めて近い距離で吾々に席を賜わつた。正に文字通意顔に咫尺し奉つたものであつたのでこの感激を更に新にし、且後日の思い出にしたいと思ひこの日から数えて丁度一周年を迎えたことを記念しこの一文を草して関係各位にも御覧に入れる次第である。

御進講の事項は左記の通であるが現下我國の鮭鱒漁業の状況から見て誠に時宜に適したものであると考えひとしおの感激をこめて申し上げますたのである。しかしこの光榮と感激は半田一個人で占めるべきでなく多年に亘り本道の鮭鱒漁業の振興とその資源保全につとめておる多くの人々と共に頌すべきであると思ふのである。

御進講は僅か十分間の持時間であるため充分その意をつくすこと出来なかつたが幸い北海道鮭鱒孵化場の佐野調査課長の御好意で参考となる関連写真を頂くこと出来たのでこれを必要箇所にあてはめて御覧をお願いしながら御説明の足りないところを補つた。

御説明終ると天皇陛下から次の三点について御質問があつた。第一は人工孵化の効果を挙げるのに魚種によつて異なることあるが最も効果の挙り易しい魚種は何か、第二は人工孵化の効果の挙ておる河川は何所か、第三は夏鮭の孵化はやつておるか等であつて生物学に御造詣深くあらせらるる天皇陛下の御尋ねとして恐懼感激し夫々御答を申し上げてこの大任を果たした次第である。

附記 左記御進講の要旨には便宜上御説明に使用した写真は文中に刷り入れたものである。

(三七・五・四記)

北海道の鮭鱒孵化事業について (御進講の要旨)

北海道鮭鱒増殖漁業協同組合

組合長 半 田 芳 男

幕末の農政学者であり又指導者として有名な佐藤信淵翁がその父信季の口授をもととしての著作「培養秘録」に農作物は「天地の化育を助く」ることの必要を説いた名文句があります。之は農業の振興は天恵に人力を加えて効果を挙ぐることで斯くして農業は著しく発達しておるのであります。このことは漁業についても同様であると思いますがこの点は漁業の場合は未だ不十分であります。

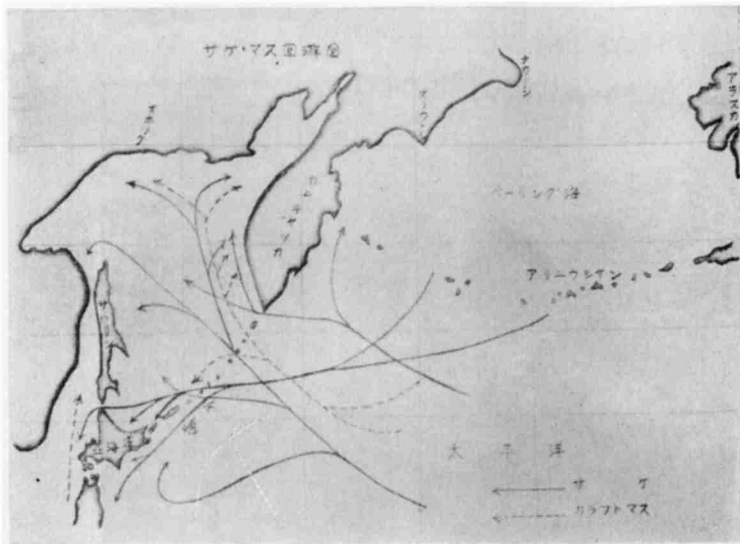
十九世紀における科学の発達は極めて顕著なるものでありますが、その一に数えらるる魚類の人工孵化は正にこの精神と相通ずるもので特に、サケ・マス類の孵化事業は最もよくその性格を表わしておるのであります。

私は現在の北海道大学の前身東北帝国大学農科大学水産学科を出て千歳孵化場に奉職した縁故でこの事業に関係して五十余年になりますが、この精神を体して得た経験に基いて本日茲に御話を申上げる光榮に浴したことは誠に感激の極に存じます。

(一) 北太平洋水域の特産である鮭属 (*Unchorhynchus*) には、*ニマス* (*O. nerka*)、*サケ* (*O. keta*)、*マスノスケ* (*O. tshawytscha*)、*ギンマス* (*O. kisutch*)、*カラフトマス* (*O. gorbuscha*)、*サクラマス* (*O. masou*) の六種が含まれております。その中サクラマスを除く五種のもはこの水域をかこむアメリカ、アジアの各国に於て漁獲利用されております。これ等の資源の一部と主として日本に産するサクラマスとが北海道のサケ・マス漁業の対象魚種であります。

サケ・マス類はその産額の多いこと、食品価値の高いことで世界有数の漁業であります。北海道に於ても古くから行

第一図



なわれニシン漁業と共に今を去る約四百年前に日本人によつて始められたと伝えられておりますが、ニシン漁業は近年全く衰退したにも拘らずサケ・マス漁業は依然として重要漁業たる地位にありまして近年は本道漁獲の首位を占めております。これは古くからその蕃殖を保護し殊に後年には人工孵化を主とする孵化事業につとめたことによるものであります。

(二) サケ・マスは春夏の候北太平洋から出て沿岸の河川に向て洄遊を始め千島列島に沿て南下し、秋から冬にかけて北海道に接岸し漁獲を免れたものが河川に上て上流で産卵致します。(第一図参照)。卵は河底の砂礫の裡で自然に孵化し翌春稚魚となつて河中に現われ海に下て成育場所ベーリング海に向いますが、この自然の蕃殖は内陸の開発が進み河川環境が悪くなり効果を期待することが困難となつたので、之に代る有効な方法として人工孵化の事業が行なわれておるのであります。(第二図参照) 海に出て成育する稚魚は二年乃至六年後に、サケでは四年後に最も多く成魚となつて以前産まれた河へ帰つて来る興味ある習性があります。之を回帰性と称えております。この事は古くから知られておりましたが孵化事業を行なわれてから確認するに至りました。

(三) 北海道の人工孵化事業は明治十一年に試験的に始められましたが、本格的に行なわれたのは同二十一年に千歳川に一大孵化場を設けてからであります。爾来八十年間に大に拡張されまして現在はこの事業は挙げて国営となり全道に五十五カ所の孵化

第二図



場を配置し、約四億二千万粒を孵化する能力を具えておりその規模は世界最大のものです。

(第三・第四図参照)

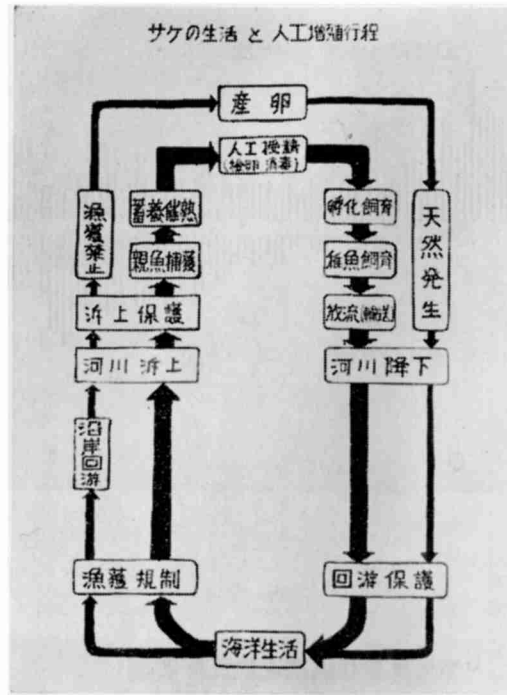
また孵化の技術は初はアメリカに習ったものだが永い歳月の間に之に改良を加え、或は独創的研究につとめて現在では孵化技術は世界的水準に達する進歩を見ました。

(四) 自然蕃殖に較べて人工孵化はどの程度の効果あるかについては未だ充分なる研究成果を得ておりませんが、実際に試験を行なつて見ますと人工孵化では九九・二%を孵化し得るに反し、自然の孵化では最良の条件の下でも二七・七%に過ぎないのであります。又特に北海道に於きまして孵化事業が鮭鱒漁業に与えておる顕著なる影響は稚魚放流数の多少は四年後の漁獲の多少に比例して現わることでありまして、之については大正年間にこの事実を見出しまして爾来之によつて漁獲の予想が出来て漁業経営に安定性を与えております。斯様なことは洄遊魚類を目的とする漁業に於ては、他に余り例がないのであります。(第五図参照)

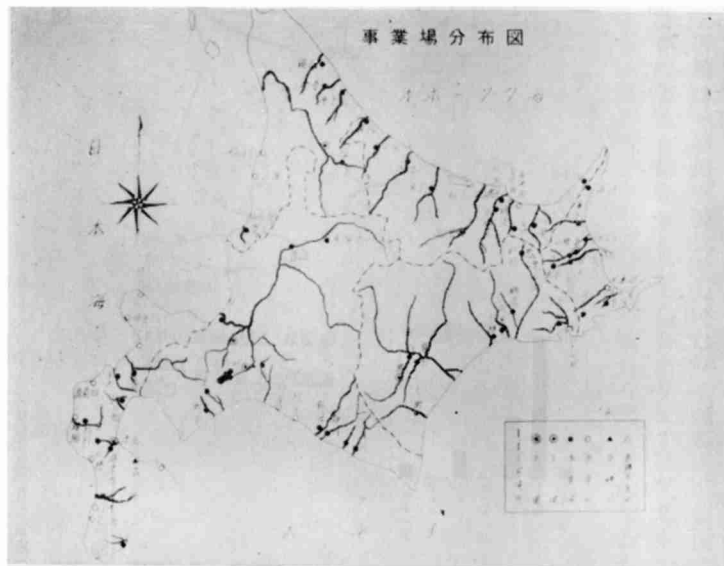
(五) この回帰は稚魚放流数に対して如何なる率で帰つて来るかを調べますと、統計上からは一%乃至二%が成魚として北海道の沿岸に帰ると云うことが解りました。又実際に稚魚に標識を附して放流した結果によれば、常呂川に於ける試験では〇・五%が再捕されております。(第六図参照)

孵化事業は国営で行なわれておりますが、これによつて利益

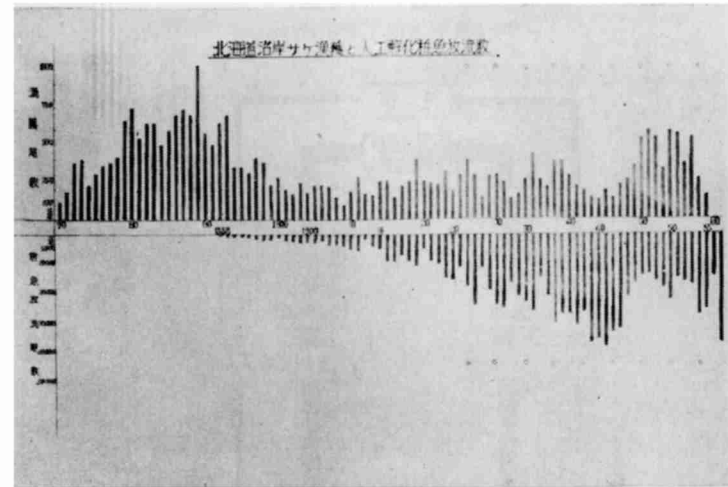
第三図



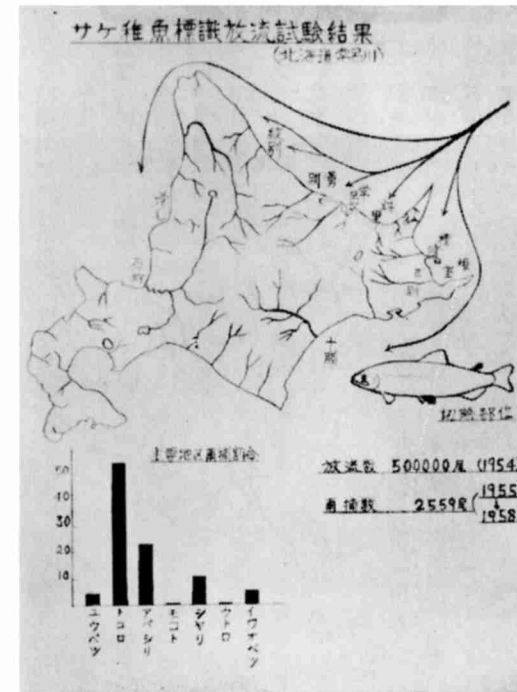
第四図



第五図



第六図



を享ける漁業者と沿川住民とが進んで共に孵化事業の遂行に協力すべきであるとの考えからその実現につとめました結果、現在では有力なる民間団体が組織されて活動するようになりました。即孵化事業は国営であります、実質的には官民一体の事業と申してよいのであります、この在り方は北海道独特のものであります。

(六) 然しサケ・マス漁業の趨勢とまた四囲の情勢から観まして今後孵化事業は一層拡充強化せねばなりません、他面この事業の効果を阻む各種の障害特に甚しい河川の水質汚濁や不法漁獲等の防除を徹底せしむる必要があります。又北太平洋をかくむ各国はその共通の資源を護るために国際孵化事業を実施する必要がありますので、その機会の到来速かなることを念願しております。

若令親魚の交配について

北海道さけ・ます孵化場北見支場

武 田 重 秀

「ますのすけ」の若令親魚の交配を行なった処二年魚、三年魚として回帰した親魚はほとんどが雄(♂)で雌(♀)は極少数であつたということをワシントン州の年報で見ましたので参考までに掲げます。

早熟な親魚から早熟な子孫、ことに三年生雌がどんな傾向に出るかを決定する。

場 所

デスチニート川ビニューゼットサウンドの最南端にある

目 的

川

生れた年	交 配	標識放流尾数	一九五七年デスチニート川に回帰した二年魚	一九五八年三年魚として回帰した数
一九五五	A 群 二年♂×三年♀	一〇三、五〇〇尾 脂鰭及右腹鰭切除	一六八♂	一九五〇♀ 計二〇五
一九五五	B 群 三♂×三年♀	一一七、九四五尾 脂鰭及左腹鰭切除	九九♂	二六〇♂ 一七〇♀ 計二七〇

(一) A 群はB 群よりも二年生♂(全部♂)が明らかに多い。

(二) A 群の三年魚の四・九%は♀、B 群は六・一%が♀で余り明確な相異はない。

(三) A・B 両群は一九五七年にデスチニート川に浜つたものの中、明らかにこの試験に参加しなかつた三年魚の♀(一一・九%)よりも少なかつた。

(註) カリフォルニアの南方からアラスカ北西部に至る迄分布して

いる(アジア沿岸のものを除いて)「ますのすけ」は普通四―五年で成魚となり平均体重一二・二五ポンド(五・四―一一・三キログラム)あり晩春河に浜て夏の終に産卵する春鱒(spring chinook)と秋浜上してすぐ産卵する秋鱒(Fall chinook)とがあり秋鱒の方は孵化して僅かの期間河川におるがやがて海にでて行き春鱒の方は大半海にすぐ下らずに一年位河川内に残つて生活する。

以上は「ますのすけ」の試験結果ではありますが、いまは故人となられた斎藤兵太郎氏がさけの交配時に若い♂を使用することを非常に嫌つてゐるだけ大きいのを使用えとやかましく言つておられたことが思い出されます。

銀毛ヤマベの飼育放流を提唱す

半 田 芳 男

摘要

(一) 本文に於て単に鱒とあるはすべてサクラマスを指す
(二) 大島正満博士の研究による琵琶鱒(アメノウウ)とその河川型のアマゴについては本文は触れていない。

まえがき

大正十年頃であつたと思うが、当時北大農学科の山内講師は多年に亘る釣魚経験から「ヤマベは鱒の子ではない、ヤマベはヤマベである」と結論して小樽新聞に寄書した。山内氏は魚学専門家でないから黙殺してもよいが、大学の先生という肩書でやつたのだから世人に信用さるる可能性が強いので鱒漁業の維持増進のために鱒の子であるヤマベを保護しなければならぬ立場のもとに漁業取締規則を制定するとともに、全道に人工孵化事業を奨励しておる北海道庁としては、山内氏の発表をそのままに放置しておくわけに行かないので、この問題に関して多少調べておる筆者——当時は水産試験場在勤——の名をもつて同新聞へ「ヤマベは鱒の子である」との反駁論を発表した。これが導火

線となつて山内氏と筆者との間には勿論であるが、第三者の立場に在る学者、技術者、釣人等から賛否両論がとび出して華かな応酬が行なわれ暫らくの間、到處でこの話題で賑わつた。

この結論は新聞紙上では勿論出なかつたが、爾来ヤマベと鱒の子の問題について真剣な研究が行なわれる機運が醸成されたことは喜ばしい収穫であつた。

筆者は大正末期に道庁水産課に転勤し、主として行政部門に携ふことになつたが、昭和二年度から第二期の北海道拓殖計画の実施により、孵化事業を拡充強化して、その効果を確保するために、鱒人工孵化放流による稚魚、即ちヤマベを保護するために強力なる措置を講ずる必要上、鱒人工孵化場のある重要河川における体長四寸未満のヤマベの採捕を禁止する規則を定めた。ところがこれでは釣遊者が困

るというので反対論が出て、これに尾鰭がついてまたまたヤマベと鱒の子との関係が論議され、小樽新聞紙の投書欄「万華鏡」を賑わしたものだ。

この第二次の論戦は前回の山内氏との場合のむしかえしでもあるが、さらに四寸未満のヤマベ禁漁是非論が加わつたので問題は複雑化した。当時の新聞投書欄は全部切抜いてあるし、また各方面から直接筆者に寄せられた書面も保存してあるので、三十余年後の今日これを読んで興味津々たるものがある。しかしヤマベに関する研究は、その後大に進み、ことに水産試験場の太田磯吉氏は立派な業績を挙げられたし、筆者も職務柄折に触れヤマベ問題に関する講話や養殖指導に当りて、その普及宣伝につとめた。

近頃では一般の人びとも、だいたいこの問題は諒解されておると思うが、時としてやはり論議的となることがある。元来この鱒はわが国の特産というてよいものであるとの観点からして、またこの主産地北海道の重要漁業の一として鱒資源の保存増殖は重視され、多額の国費と受益者の協力によつて孵化事業の拡充整備、特に鱒十億粒採卵孵化拡充の実施を見る機運になつたが、鱒については、とにかく軽視され勝であることから、この際これを改善する必要がある。それにはかつての拙著「ヤマベの話」に増補改訂を加えてヤマベ問題の認識をよく把握して貰い、次いで鱒の孵化放流事業の効果増進を図る上に、特に必要と

認める銀毛ヤマベの飼育放流の実施することを提唱する次第である。

一 ヤマベ物語

ヤマベの名称

北海道の長い冬の生活から解放されて山に野に、または河や湖沼に自然の行楽を恣にして煩わしい世俗をしばらく忘れ、かつ心身ともに健やかならしめんとするのが、人情であろう。ことにこの際釣遊もその中に含まれて、これを楽しむ人が益々多くなつたが、就中最も興趣に富むものは本道独特というてもよいヤマベ釣であろう。そして釣たヤマベを見ては「これが鱒の子か」「イヤ鱒の子でない」との論争も起ることは昔もいまも同じであらう。またヤマベ釣は趣味行楽として捨て難いので大に行なわれておるが、この奥には鱒の養殖保護を阻害してはならないというコワイ眼が光つておることを忘れてはならない。そこでヤマベは鱒の子かどうかの問題が起きて来るのである。

ヤマベと称するは、北海道と東北地方の一部であつて本州の大部分ではヤマメと称える。しかしこの他に本州での名称は各地各様である。例えばヤマメ(関東)、アマゴ(関西)、ヒラメ(山陰)、エノハ(九州)、アメノウウ(琵琶湖)等々であるが右の中アマゴ、アメノウウ等はヤマベとは別種とする学者もある。即ちアメノウウはサクラマスとは

異なるもので、その河川型のアマゴは体側に朱色の小円点を持っており、本州中部箱根を境界として以西の太平洋に面する河川におもむくものである。また東京附近でヤマベと称する淡水魚は鯉科に属するオイカワを指すもので鯉類でない。

ヤマベの語源については、確実なことはわからないが、ある説によればヤマベはヤマメより転訛し、ヤマメはヤモメから出たという。ヤモメと称せられたのは、この魚には雄ばかりで雌がないからだとのことである。またヤマメというのは山間の清流におもむく美しい可憐な小魚であるから山女ということから出たとの説もある。

アイヌ人はヤマベをボンイチヤニと称する。ボンは小さい、イチヤニは鯉であるからヤマベと鯉とは同種類で、しかも親子関係あることを意味しておる。

ヤマベと鯉との関係

ヤマベは鯉の子か、あるいはヤマベはヤマメで、まったく異種であるし、親子関係はないかなどの議論は昔から到處でヤリトリされておるが、結局その結末がつかないでいつとなく有聊無聊に終るかと思えば、復々それがなにかのキツカケでむし返さるる状態である。要するにこの両者の関係が判然としないまま経過した。しかし種類としての特徴を調べ、またこれを飼育して見れば、まったく同種類であつて唯時期、場所の異なるにつれて形態、色彩、性質に変化を生ずるのである。そしてヤマベと称せらるるもの

に面する地域、その他千島諸島、樺太、西比利亞、勘察加、北米太平洋沿岸に産し、わが国本州には産しない。近年本邦能登半島以北の沖合で流網で早春から初夏にかけて漁せらる。いわゆる日本海鯉はこの樺太鯉が主でこれに桜鯉が混獲される。

樺太鯉と桜鯉とはまったく別種で性質も異なる。ことに稚魚は産まれた年の春には、必らず海に降って河に残るものない。これが桜鯉と著しく異なる点である。従つて樺太鯉には桜鯉の幼魚、即ヤマベに該当するものがないから、本文のヤマベ問題には無関係である。

鯉の習性と生活史

桜花綻ぶ頃に漁れる鯉は、ちょうどその味の最もよい頃である。その発刺たる美しい銀白色の膚と、脂切た深紅色の肉を魚屋の店頭で見る人は、その味覚に誘惑されずにおられないであろう。しかし、鯉はその漁獲は地方によつては海では一月頃から沖合で漁れるものもある。四月頃から沿岸に近づき河に上るのであるが、この頃の鯉は口辺黒色を呈するので口黒鯉の名称がある。これに続いて来るのが桜鯉で、これから九月頃まで続くが、この鯉は河川の極上流まで上り八月頃以後になれば産卵態勢をとりまつた変えた姿になる。即皮膚は一体に暗赤色を呈し、吻端は延びて曲り、歯は鋭く、背は高まり、体は偏平となり、肉色は白く変わる。この変化は雄魚において特に顕著である。こ

の大部分は鯉から産まれた幼魚即幼魚時代のものであることが解た。

鯉の種類

北海道で鯉と称する魚の中には、実は二種類ある。しかも両者は著しく習性を異にする。なお鯉という名称のつく魚は他にもあるので、一応ここでヤマベとの関係の有無とともに区分しておかなければならない。

第一に述べるものは桜鯉、真鯉、海鯉、板鯉、太鼓鯉、口黒鯉、イチヤニ鯉等の名称があつて、いづれも同一種類の異名である。わが国の特産というてもよいもので北海道本土、千島の択捉、国後の二島（中部、北千島及びその以北には産しない）樺太、朝鮮、本邦日本海及び本州中部以北の太平洋に面する地方に多少分布しておる。勿論この中で北海道が最も多く、近年は桜鯉の名称で一般に知られておる。

桜鯉の名称は比較的新らしく、明治末期に根室地方から起つたもので、桜花綻ぶ頃から漁れるので、この名称をつけ、これに続いて漁れる樺太鯉と区別したのが、起源であるが、その名付親は筆者の推定であるが、当時西別孵化場長であつた内海重左衛門氏（昭和二十四年没）でないかと思ふふしがある。

第二は樺太鯉であつて、これには青鯉、本鯉、背張鯉（産卵期）の名称がある。北海道では太平洋及びオホーツク海

の頃は肉の脂肪は減て、味極めて悪く、この春河に浜上し始めた頃の面影はまづたくな変化である。唯雌の腹内にある筋子は粒が大きくなり、色は美しい橙紅色を呈し、かつ粒々分離して成熟して産卵の適期に達したのである。

鯉の産卵は八月から十月にかけて、水清く浅い礫底を雌が尾鰭をもつて溝を掘りこれに産卵する。平均一尾二千五六百粒を産む。産卵を終れば雌は礫をもつて卵を覆うのである。産卵後の親魚は海を巨る遙か上流の河川に種々の障害と闘つて急流を浜り瀑布をとび越えて来て、しかも産卵期には絶食して畢生の大事業である産卵を終るので、魚体は疲弊の極に達し、皮膚は破れ、肉は露はれ鱗は損じ、魚体に細菌や寄生虫が附着して活力は頓に衰え蹣跚として河汀に漂泊し間もなく死亡する。

しかし親が生命を賭して産んだ卵は砂礫の裡で安全に発育し、三カ月ばかり経て孵化して稚魚が生れる。稚魚はその性質として二、三月頃までは依然として河底の礫の裡に潜んでおり、河水が温む頃となれば一人前の稚魚となつて尺余の礫層を押し分けて河中に現われる。その時の大きさは三厘位で小さいながらも体の両側にヤマベ特有の斑紋が出ておる。河中の微細な動植物や水面に飛来する小昆虫類を嗜食して成育し、いよいよ問題のヤマベの生活が始まるのである。

稚魚は次第に成長して、夏になれば六厘内外の体長とな

る。ちょうど暑い時であり、水辺には種々の昆虫類が飛来するので盛に水面に躍てこれを捕食する。この頃毛針をもつてヤマベを釣れば、実によくかかることは釣人の知つておるところである。やがて暑さもいつしか去り霜が来る頃になれば、河岸の紅葉は赤黄を織り交ぜた錦を水に映ずる時となるとともに、新らしく親になつた鱒が、海から上つてきて産卵する。その場所はあたかも前記の鱒の子の遊ぶ所であつてここに興味ある。そして物凄く生存競争の場面が展開される。それは親鱒がすでに述べた通り、数カ月の艱難と辛苦の海からの長い旅を続けて、ようやくその目的を達せんとする時であるのに何事ぞ、その産んだ卵を食わんとして大小多数の鱒の子が、その後には控えておるとは。同類相食むというか否、それよりもさらに深刻な親子兄弟相食むという方が適切であろう。生きたために自分の親兄弟を犠牲に供することは、人間社会の見慣れた世相ばかりではなく、魚の社会にも行なわれるは已むを得ないかも知れないが、万物の霊長と自任する人間が、この事実を知つては省て感なきを得ない。

筆は脱線気味となつたが、かように卵を食はんとして集る鱒の子は終にその目的を達して卵を食うことは少くない。このころの鱒の子の胃袋の中を調べて見ると、必ず鱒卵が這入しておる。釣に経験ある人は筋子を以てヤマベを釣るのが最も有効であることを知つておる程卵を好むので

し、特有の斑紋は判然と表面にでてないし、背鱗の前端が黒色を帯びておるのが特徴である。この銀白色は鱒のいろであつて、この鱒は剥れ易いので、この鱒の下には特有の黒い斑紋がハッキリ現はれておる。この体色の鱒の子は銀毛ヤマベの名称がついておる。この銀毛ヤマベの外に前年早熟した雄は黒ずんだ鱒の剥れ憎いもの、前年早熟しなかつた普通のいろの鱒の子も相当おる。

前々年の秋に産まれた卵からでた鱒の子は、前年中一カ年は河川で暮らして本年春には二年魚となり、いわゆる銀毛ヤマベとなつておるのであるが、その大部分のものは雌であつて雄は少いが、これらは五月ころには河を下て海にでるのである。故に六月以降になると河に残る鱒の子は雄が多く雌は非常に少い。これがヤマベには雌がないと称せられるゆえんである。それで銀毛ヤマベの雌雄の関係はヤマベ問題を論ずる上に極めて重要なものであつて注意を要するものである。

河に残るものは大部分の雄と少数の雌で、この年の秋に十五種内外の大きさになり、さらにその翌年すなわち三年魚で三十種あまりの大きさになる。このころは前の早熟雄も一人前となるし、極めて少いが雌も産卵する。この河の中で成熟する鱒の雌は一尾二百五十粒乃至三百粒の卵を産む。

鱒に銀毛ヤマベと称せらるる、二年子で海に下たものは

ある。このころの鱒の子の大きさは八〜九種内外になつておる。しかるにこの小形の鱒の子の中の雄は成熟して白子のでるものもある。そして体色は黒味を帯びておることもよく知られておる。それが鱒親魚の産卵の後を追いつくのである。早熟というか、とにかくこの小形成熟魚は鱒親魚の産卵に付き纏ておるので産卵に関係あるかのごとく考える人がある。すなわち鱒の雌にこの小形の雄が受精するのだと推定するのであるが、これはすでに述べた通産卵を食はんがためにくるので、鱒親魚は立派に正規の雌雄一対で産卵を営むのである。このことは産卵場集る鱒の子は小形成熟の雄ばかりでなく、未熟の雌雄も多数一緒であることでも解るし、また、このころに産卵する鱒にも同様ヤマベが蟬集するのでも目的は食餌を索るにある。

秋もやがて去り、冬となると河水温は下り、鱒の子はそれぞれ河中の比較的温暖な場所、主として湧水のあるところかまたは湧水の支流などに移つて冬を越す。水冷ければ魚も食欲なくなるし河の中にも餌料となる生物も少くなるので鱒の子は、殆ど絶食状態となる。但湧水中におるものはある程度餌をとり成長する。しかし冬も去り水温むころとなれば再び以前の河に姿を現はす。すなわち四月以降には二年子として出現するわけだが、冬期間は成長鈍いため前年の暮ころの大きさとあまり変らずむしろ瘦せておる。

この時の鱒の子は体は、比較的細長く体色は銀白色を呈

一カ年の海中生活を経て立派に成長し、体長四十種から五十五種くらいに鱒となつてもと産まれた故郷の河に帰る。すなわち回帰性を發揮する。海に下た銀毛ヤマベは大多数のものは雌であつたが、成長して河に帰る鱒について調べれば矢張り雌が多数を占めておる。普通百尾の鱒の中六十尾から九十尾は雌である。なお二年子で海に下たものについて海中生活一カ年で鱒となるものは普通だが、中には河川内で三年目に銀毛ヤマベとなつて海にでるものも少しはあるので、これは四年生の鱒となつて河に帰るのである。

鱒の子すなわちヤマベは、河の中に現はれて満一年の生活をして体長十三種内外になるが、その中から銀毛ヤマベになつて海に下て行く。その多数は雌である。従つて雌は多く河に残るのである。ヤマベとは鱒の子の河におる時代のものを目指すのであるから、その中には海にでるもの、すなわち銀毛ヤマベと河に残るもの、すなわち河川型のものとが混じておるわけである。しかれば何故に雌が多く海にでて雄は反対に河に多く残るかの学術的の説明は、未だ判然としないが想うに健全なる沢山の卵を産むのは広い餌料の豊富な海洋にでて成育せねばならない必要上、雌が多く海にでるのではないか。しかし雄もこの必要は雌と同じでよいはずだが、すでに述べた通り、雄ヤマベは雌にくらべて海には少くでて多数が河に残て小形に甘ずることは説明

がつかない。これは恐らく鱒は元来淡水に生息しておつたものであるが、前述の理由で雌はやむなく海にすることに
なつたが、雄には本来の淡水棲息性が残されておるからであ
らうと説明する人もある。

理由付けはともかくとしてヤマベと鱒の子とはともに、
鱒から生まれたものであることは確かである。

かような関係は本種によく似ておる大西洋鮭（欧米大西
洋に棲息）にもあることが知られおる。すなわちその子は
河川型（Par）で、一年河川におり銀毛ヤマベに比敵す
る Smolt となつて海にでて成育し、その後成魚となり
産卵のため河川に帰るのである。

ヤマベの保護

以上ヤマベと鱒との関係について述べたが、この両者は
同種であり、かつ親子関係があるということを示すに
ためである。しかればこのことは何の利益があるのか、
そのこと自体が学問上の利益はあるが、さらに世間に貢献
する何物かなければ意味はない。幸いこの関係が明白にな
つて鱒の保護方法が確立されたことである。すなわち鱒漁
業資源の維持増殖を図るために、河川内の鱒の稚魚すなわ
ちヤマベを保護して、安全に海にでることにつとめねばな
らない。この際ヤマベはヤマベでないという觀念からヤマ
ベを濫に釣獲することになれば、鱒の減少を来すわけであ
るから、ヤマベは保護して海に下らせる必要があるを判然

といいきることができるのである。この意味で北海道漁業
調整規則によつて、これを保護すべき河川を指定し、この
河川内及海面で全長十二糎未満（四寸未満）の鱒の子や銀
毛ヤマベの採捕を禁止しておる。すなわち十二糎未満の鱒
の子は、将来海に下るものと河に残るものと混在しておる
から、一応全部保護しなければならぬ。この鱒の子はや
がて、その中から銀毛ヤマベとなつて海に下り、鱒に成育
回帰するものであるから、当然銀毛ヤマベも保護しなけれ
ばならない。全長十二糎未満のヤマベの採捕を禁ずる根拠
は二年魚の春期における平均体長の安全限界をとつたもの
である。

従つて河でヤマベを釣る人は、前に述べた制限外のもの
を釣ることは、一向差支へないのであるが、実際には十二
糎未満のものや、銀毛ヤマベと外のを区別して釣る
ことは、先ず不可能であり万一釣り上げたものが、制限に
該当するものであつた場合に、これを再び河に戻すことを
やるであらうか。戻しても死亡するんだからとの理窟で、
そのまま取得するのではなからうか。これ等は釣人の良識
に信頼して鱒の保護問題に十分なる関心を示してもらいた
いのである。

以上總説したので、ヤマベは鱒（あるいはその幼魚）で
あると断じてよい。しかしなおこの両者が異なるものである

と説くのは形態、体色、外観等が時と場所とによつて著し
く異なることがある。その一面を捉へて同一種とすること
を拒むためであつて、特にこの問題と取組んでいない人と
しては、やむを得ないであらうが、ことに、釣に凝ておる
人は兩者異種の観方をし、しかも微に入り細にわたる觀察
を加えて、その考えが先入観となり、これに執着し同種説
を容易にうけ入れない。従つてこの説は索強付会に陥り、
いわゆる白馬は馬に非らずの説となり、前項に述べたヤマ
ベの保護を図る上に支障を来す惧ある。よつて左にヤマベ
と鱒との異種説を要約し、これに対する反駁を付記して本
文の結末をつけたいと思う。

異種説	反駁
一、鱒の子は体色銀白でこれ を握れば鱗が剥れ易しいが ヤマベは特有の体色で鱗は 剥れ難い。 ヤマベには雌がない。	鱒が産卵して孵化した稚魚は 雌雄略、半数で満一カ年間にヤ マベと称せられて河川におる。 翌春雌の大部分と雄の一部分 が自衛上体色銀白色（銀毛ヤマ ベと称す）となり初夏までは海 に下て行くがその他のものは河 川に残つておる。 従つて海にでて鱒に成育した ものは雌多く雄少く河川に残る ヤマベは雌少く（絶無でない）

異種説	反駁
二 海から河へ回帰した鱒が 産卵する際に鱒の雌雄で産 卵し孵化したものは、鱒の 子であるが鱒の雌とヤマベ の雄とで産卵し孵化した稚 魚は河川型のヤマベで生涯 この型でおる。	雌多い 前段の鱒親魚同士の産卵孵化 による稚魚は鱒の子であること は間違いないが鱒の雌親魚とヤ マベの雄では産卵しない。矢張 り前段同様鱒同士で産卵する。 この状態を見て鱒の産卵に当て 多数のヤマベが集つてくる。そ の中にはヤマベの形で成熟した ものも混じつておることからき たものであらう。このヤマベが 集まるのは鱒の産卵を食するた めであつてこの魚群の中にはア メマス、ウグイ等もおる。また このヤマベは独り鱒の産卵にば かりでなく同じ時期の鮭の産卵 にもつき纏つておる。釣人がよ く知つておる通りヤマベは筋子 を餌にするのがきわめて有効で ある位この時期に筋子を飽食す る。 項目を特に定めないがヤマベ と鱒の同種説として二三補足す
三、その他項目を挙げる煩を 省くがいろいろある。	

異種説	反駁
	る。 ○ 鱒卵を孵化し稚魚を池中に飼育した最初の試みは千歳孵化場で明治年間に行なわれたがその結果はヤマベと鱒との同種説を確めておる。特に飼育後三年で雌がヤマベ型で成熟産卵した。 ○ 後年千歳孵化場で鱒卵を孵化し稚魚を池中飼育したところ二年目の春に銀毛ヤマベとなつたものが約半数、これを池にとめおいたら死亡続出し夏季を越すものなかつた。これは海に下ることできなかったためと解する。 ○ 釣人がよく知つておることであるが鱒の河川に浜上産卵が多かつた翌年は河にヤマベが多くでる。

二 銀毛ヤマベの飼育放流を提唱す

北海道の鮭鱒孵化事業行なわれてから八十余年になるがその最初は鱒卵を漁川及び豊平川において採卵して札幌僭

しておることの不合理を非難する声を聞くしまた事実この状況が著しく実見さるるのでその対策に関係者が乗りだしておるが鮭鱒の資源保護は勿論重要であるが全道的に分布する鱒の資源の保護はより以上に重要であらう。しかしこれまたほとんど無制限に釣獲を認められておることは筋が通らぬことである。宜しく鱒に成長せしむるために海に下るヤマベの有効適切な保護を講ずべきである。時恰も鮭鱒増殖に関する画期的飛躍の機運到来し十億粒孵化放流の実現に期待をかけるのであるからこの際旧来の踏襲から脱して新規軸をだすべきことを希望しここに桜鱒孵化の効果を増進するに効果ある銀毛ヤマベの飼育放流の実施を提唱するものである。

すでに縷々述べた通りヤマベの本体、習性、保護の必要性は一応明らかにしたと思ふ。また現在行なわれておる鱒の人工孵化事業は採卵、孵化の技術は間然とするところないのであるが河川に放流された稚魚すなわちヤマベの保護は漁業調整規則によつて体長十二糎以下のものは採捕を禁ぜられておるが実際にはほとんど大部分は釣獲されておる実情であつてこれを是正するために銀毛ヤマベとなつて正に海に下る態制にあるものを安全に海にできるようにすることによつて如上の弊を大に緩和し得るのである。但しヤマベは銀毛ヤマベになるまでの間一カ年余は河川型ヤマベと区別なくとも河川におるので銀毛ヤマベになるものを

楽園に収容して人工孵化試験を行なつたもので鮭の人工孵化よりも以前である。しかし漁業の規模とその重要度は鮭の方が大きいのでその後は鮭の孵化に重点をおかれたため鮭人工孵化事業は大いに進展し、その効果顕著なるものがあるが鱒はこれにくらべて幾分軽視されたためでもあるがまた鱒の習性や孵化事業の運用方法等が鮭の場合と異なる点もありこれと同等または以上の効果を期待することできない状態に推移し鱒の漁獲も逐年減少して現在に及んでおるのであると言へる。就中鱒孵化事業の進展を阻む最も著しい原因はヤマベの釣獲が事実上無制限であることである。すでに述べたところであるが鱒の孵化稚魚の約半数（大部分）は河川生活一カ年で海にでるのであるが、この河川生活中に釣獲さるる数たるや莫大のものである。最近鮭や樺太鱒の稚魚はその習性上長期河川内に止まるために飼育して成長を図る必要が叫ばれておる。しかるに桜鱒は銀毛ヤマベで一年余、河川型ヤマベでは終世河川生活が可能であるから本来ならば自然が稚魚の成長を保証してくれるので増殖上好都合であるがその代り釣獲とその他の河川内に起る障害の被害率は高くしかも今後益々激化する情勢に在ることは孵化事業施行上適切な対策を急速に採らねばならないと思ふ。最近新聞紙上において支笏湖鮭鱒の不法漁獲の増加防止や国が孵化放流する鮭鱒を観光客の中にはほとんど生業とする者もあるがこれ等に無償で釣獲するに委

選別して保護する方法はない。そこで鱒卵の孵化飼育は海に近い下流地点において行ない、ここで銀毛ヤマベになつた稚魚を海に放流する。孵化の適地ない場合には孵化直前の卵または仔魚を孵化場から移送して飼育をしてもよいだらう。かくすれば銀毛ヤマベは釣獲の厄から免れて海に安全にでて爾後の回帰に寄与すること従来の上流放流方法の比でなくなるはずだ。飼育によつて生ずる河川型ヤマベはこれはそのまま河川に放流して釣獲資源とするもよいしあるいは他の有利な使い途に供してもよい。

この飼育放流を行なうならば孵化数の大体五〇％は雌であつてこの大部分は銀毛ヤマベとなる。また残雄の五〇％の一部分はこれまた銀毛ヤマベとなつて海にでるのであるから孵化数の過半数は安全に海に送りだすことできるわけである。

この方法によれば孵化事業の実況を沿岸漁民にも見てもらえるしまた鱒は海にでも鮭や樺太鱒と異り遠く北洋方面に回遊しない沿岸性のものであつて沿岸漁業の資源としても役立つから沿岸漁民からのこの仕事への協力も期待できるものと思ふ。

以上極めて抽象的であるが鮭人工孵化事業の効果を確保増進するには従来のは期待できないことを憂へ幸い多くのヤマベ研究者の業績を役立て銀毛ヤマベを飼育して放流することが孵化事業への貢献するゆえんであると信

じ敢てこれを提唱するものである。勿論この実施に關しては飼育の施設、技術及び運用方法等各部門について關係機關において検討されねばならないと思うが筆者としてはこの趣旨を述べて各位の賛成を得て實現の速かなることを期待する次第である。

(三七、六、二〇記)

鮭鱒孵化場の疎開を提唱す

広 田 源 造

札幌市北二条西十四丁目

石狩川は底清くわれ等が心をあらわして大野ヶ原を流れたり。この名句が生れた頃は、清流を好む鮭鱒の母なる川として、石狩川は理想郷であつた。本道の鮭鱒孵化事業の歴史は古く、八十余年の星霜を閲している。人煙稀な本道の内陸が開発され、それに伴つて母なる川の流域の都市は膨脹し、そこから汚水がドンドン放流され、それに工場の廢液、農村からの毒液流出というわけで、これでは魚類が育つわけがない。「人が何十年も先にきて仕事をしているところへ、後からでてきて、人の仕事をぶちこわして了う」と、いい分はあるけれども、これを、お預けとして、河川を汚水汚物の棄場にしていることに対する不当を鳴らす声は漸く高まつてはきたものの、ここ五年や十年で鮭鱒が混濁毒性化した川を母なる川として慕うによくはなるまい、

今、石狩川どころか、といったら悪いけれども、東京の海、東京湾は、世界で一番不潔な海と思われるのだが、そこか

ら獲れる魚介類は、江戸前を誇つて都人士の食膳を飾つてゐるのだが、それ等は遂先刻まで、湾内の落し紙の粉末の中で全身大腸菌の付着した代物ではなかつたらうか。浅草のりは、浅くて臭い海でとれるから浅臭のりだ等という惡口のでないうちに海をよごす河川を清潔にしないでほならないのに、こんなことを思うと石狩川等は、まだまだというわけだらう。本道の鮭鱒孵化場のある川が、母なる川としての役目を果し得る状態になるまで、孵化場を適切な地帯へ急速に疎開することを提唱する。

差当り思いつくところとして、北見、宗谷の冷害凶作地帯がある。あの辺はよく寒つた年は例外の年で、資源も産業も見ろべき程のものはなく、勿論河川を汚すような原因もない。ところがミンクの養殖と鮭鱒孵化事業なら、この地方程立地条件のよいところはない。これらの事業は現在もあるけれども、誠に微微たるものである。

鮭鱒が国際魚としての性格を年毎に濃厚にしてきた今日、わが国が米ソ加等に互して、日本から放流された鮭族が北太平洋を舞台に健全で大量に活動していることを主張するためには、関係国の交換視察団がいつ訪れても申しぶんのない環境の河川で孵化事業を行つていなくてはなるまい。農、工業者に、「何十年も人のあとからきて」と文句を言いたいところだが、むしろ彼等に孵化場の移転疎開費燃出に協力を求めるべき機会に今日差かかつているのではなからうか。

孵化場の疎開は、国内的問題としてよりも、国際的に重要化した今日、国として対策を急ぐべきだ。特に根室、北見、宗谷の河川に重点をおいて孵化事業を飛躍させることは、オホーツク海への出漁を早期に取戻すためにも有効と思う。

孵化場の想い出あれこれ

谷 口 達 三

思えば、八年間の永い水族館勤務から解放され、再び道水産部に転じましたが感慨無量の一語に尽きます。

某日ご挨拶がてら中ノ島の孵化場にお邪魔しましたが、いつ訪れてもここは懐しい所です。特に昭和二十八年の火災からまぬがれた開場当初の建物や池、手入の行き届いた構内の庭などを眺めていると、ここに勤務していた二十代時代の血がこんこんと湧き出るを禁じ得ませんでした。

偶然、私が訪れたその日は、竹谷次長の留萌支庁長にご栄転の送別会があり、構内の名物桜の下で開かれていました。私も昔の同僚のご厚意により仲間入りをさせて頂いたが、往時の感慨一入のものがありません。さらに現在本場嘱託として今なおくしやくとして水産界にご活躍の元北海道水産試験場長高安三次氏から「水試生活二十七年の思い出」と題する北水試月報の別冊を頂くに及んで「思い出を語る」には未だ早い年輩と思ひながらも懐旧の情禁じが

たく、ここに拙文を草するわけであります。

染退孵化場時代

昭和四年六月十七日、駒ヶ岳が爆発し、この災害復旧事業が開始したのが五年四月、私は後の三代目北海道鮭鱒孵化場長（当時道庁水産課養殖係）野田信俊氏と恩師藤田経信先生のご推薦で、昆布礁復旧事業担当技術員として、満三ヶ年、尾札部村漁業組合に奉職したのですが、一応目的も完成しましたので、転職しなければならなくなり、当時道庁水産課養殖係主任技師であつた半田芳男氏に、この転職方をご相談しましたところ「日高水産会（浦河町）に奉職せんか、本会は静内町に染退孵化場を経営しており、今のところ会の財政は四苦八苦ではあるが、一年辛棒すれば、来春民営三十七カ処の孵化場が道営に移管となり、従来の孵化場員はそのまま道庁採用になるのだが……どうか？」

と疑められ、八年四月日高入りしたが、そもその孵化場生活の第一歩となつたのであります。

七月頃まで道庁補助の対照となつていた飼育池の設計にかつたのでありますが、なにせ生れて始めてのことと、その間、会の財政はいよいよ苦しく、私と染退孵化場勤務の前田篤君の給料すら停滞の有様。そこで会費の徴収に戸別訪問もせねばならず、仲々思うように参りませんでした。しかしどうにか認可指令を得て、着工の運びとなり、工事監督として静内町市父（現在の御園）にある染退孵化場に参りました。ところが工事請負の梅原某は、若輩のこちらの言い分をなかなか聞いて呉れず。私としては明年から自分等の手にかかる池になると思えばこそ立派なものにしたいいし、なかなか苦勞をしました。しかしやつと竣工したので、検定を受けたのですがこの時の検定官が半田技師であり、ほつと一安心したものの、なにせ始めてのことなのでビクビクもの、何かお叱かりを受けるか、もしや減額されるのではないかなどと非常に緊張して半田さんをお迎えしたのをはつきり覚えております。

その時に半田さんが申すに「来春はこの孵化場も移管になるが、ひよつとすると日高支場になるかもしれない、そうすると君は支場長になるかもしれない、しつかりやれ」と激励され、若い私は感激して、この年の孵化成績をあげるべく、前田君とともに夢中で頑張つたため親魚捕獲受託者

側から白い眼でみられたものです。

かくて昭和九年四月一日付で、この民営三十八の孵化場は道庁移管となり、四十九人の民営孵化場員が採用になりました。私と一緒に発令された民営孵化場員の方で、今なお終始一貫孵化場で活躍されていられる方のなかに鴨川肇、押味幸一、佐藤三太郎、森五一、蹴場富太郎、鶴田広、八木沢喜家、白井義雄の諸氏がおられるとのことですが、こんご一層のご健闘を祈ります。

しかし、北海道鮭鱒孵化場としての本場は千歳に、支場は西別、北見、国後、択捉の四場と三十七事業場となり、当初計画の日高支場はとうとう実現しませんでした。

前記のように四月一日をもつて移管となり、私も採用されたものの「助手ヲ命ス月俸六拾円」では、この正月に迎えた新婦の手前、自慢にもならず、大へん弱りました。というのは、実は移管になり任官してから結婚する予定が、他人は無責任なもので、雑音を入れ始めたので、両親が心配しだし、正月休みに帰札したところ否応なし挙式したようなわけで、今の若い方のように、改めて新婚旅行もやらず、孵化場に連れて来たのが、ハネムーンというわけでした。おまけに静内駅に着いた時は生憎く何年振りかの猛吹雪、車は止る、停電はする。やつと馬車をたてて十四軒の雪路をたどつて夜遅く着いたものの、孵化室兼住宅の建物はすでに傾き正にピサの斜塔を想わせるシロモノで床は

ところどころ落ち、障子、襖は破れ放題、加えて薄暗いランプ生活ときたので、都会暮らしの彼女はすつかりおどろき泣き出す始末、とうとう半月ほどで札幌に帰つたのはつくづく閉口しました。もつとも水産会としては財政難もあり数年後に移管になる孵化場なのだから手入れをしなかつたのもうなづかれますが、余りにもひどかつたのです。

さて、移管は実現され、本場も千歳に出来たが、職員の内陣容は千歳孵化場のままで、予算の執行も行き届かず、道庁の用紙類が届いたままで、なに一つの指示も無く、俸給だけがきちんと二十一日に支払はれる有様で「なるほどやはり官営とは違うわい」と妙なところで、感心したものです。

それでも、六月頃から色々と公文書が来るようになり、私も七月二十八日付で主任の辞令を頂き、九月三日付で「北海道庁技手兼北海道庁属」に任ぜられ、本場在勤となり、後任は浅黄谷成城君が赴任。これで一人前になつた気持ちで勇躍本場に着任致したわけです。

なぜ兼属になつたかと申しますと、当時本場の属官の定員は一人なので品川属が収入出納を受持ち、私が物品出納と官有財産の方も担当しなければならなかつたので「二枚鑑札」と相なつたからです。かくて十四年四月胆振支庁に転勤するまで、六年間本場にご厄介になりました。

千歳の本場時代

さて、本場は未だむかしの面影がありまして、周囲は密林に囲まれ、深山幽谷の気がみなぎつておりました。夜などはほんとに淋しく、名も知らぬ鳥の啼声が妙にわびしく聞こえたものです。一日一回孵化場の馬車が冬は馬糞となり、八軒離れた千歳村に通うのですが、この便が吾々を場員の食糧を始め色々のものを運ぶ唯一の機関で、係りの千歳民之助さんもまたよく出来た方で、いつも笑顔で接して頂き、随分お世話になつたものです。

場長の半田さんは道庁水産課兼務でしたから週の半分は出札されているのですが、本場を立つ時も帰られる時も私も庶務係のものは、玄関までそろつて送り迎えたものです。職員は皆若く、品川属を除き、皆二十七、八才前で従つて場長とは地位も格段の開きがありましたから親子のような感じがして絶対的に何をするのにも、鶴の一声でまゐりました。

もつとも、職員の数も少く、場長のほか技手が四人、助手が九人、定夫が三人、傭人が二人計一九人でしたが、その後中ノ島に本場が移つてからは三十人に増えたようでした。従つて数が少ないのですから何をやるのにもよく纏り易く、全員家族のような親しみが溢れていました。

当時の青年職員のうち学位をとられた岡田篤氏は北大水

産学部佐野誠三氏は本場研究室におさまられ、升田清、桜井基博阿氏は水産試験場の首脳として坂本勝一氏は水産庁に、中山忠衛氏は道の水産課長としてそれぞれ活躍されております。

確か十年の秋頃と思いますが、大雨のため支笏湖が増水し、第四発電所堰堤から放水したため孵化場橋の橋脚がえぐられ、危険に瀕し、構内の堤防は崩潰を続け、今も残っている官舎と第四孵化室が流失一步手前に追い込まれ、場員は三日間昼夜総動員で、大正初期先輩方の植えられた落葉松を切り、丸太と土俵をつくり、胸まで水につかりながら「チョンダーチョンダーも一つチョンケー」とかけ声も勇ましく……と申上げたいが、三日目頃にはいとも情けない声となり、それでもモンキツキをして闘ったことは今の若い職員方の想像も及ばないことでした。過日お会いした江口弘君なども「自分はこの年に採用された新米であつたが、先輩方に気合をかけられてひどい目にあつたあの時の苦ろしかつたことは今でも忘れられない」と申しておりました。カーバイトに照らされ、仕事始めも、食事の合図も、鐘一つでとびついていった皆様の顔が生き生きと懐しく浮かぶのがなんといつてもこの頃のことです。

十一年十月の陸軍特別大演習並びに地方行幸の際、札幌大本営で御料に供されるため本場では調達の御下命をうけた種類はヤマベ、ニジマス、ザリガニの三種でしたが、ヤ

大演習で面白いことがありました。大演習の始まる数日前と終了後数日間は軍人の本場見学が非常に多かつたのですが、この人たちの案内に、始めは将官級には場長が当りましたが、余り訪問が頻繁なので、飯泉功氏と私に一切委されたのです。ところがある日、見学を申込まれたので私が出てみると、本庄繁、阿部信行、川島、の三大将が立っているではありませんか、それにこれらの大將方は他の方のように別に新しい服装をしていませんでしたが、本庄さんの顔は満洲事変以来新聞でよく見覚えており、有名な方ですから、とつさにこれは私のみが光榮に浴しては悪いと思い、早速場長に告げ案内して頂きました。私が後について参りましたが、阿部大將はなかなか博識のように見受けられました。

その時千歳村役場から電話でいま支笏湖から秩父宮さまが姫鱒釣りの帰り、たち客られるからと連絡ありましたので、私はこの旨を場長に申上げたところ、これを聞いていた見学なかばの三大将は顔を見合せチョツと私語を交したトタン「帰ろう」と今までの威厳もどこへやらそこそこに引返えされた時には、なるほど上には上があるものとつくづく考えさせられました。

いま一つ面白いことがありました。大演習の前日であつたと思いますが、当時の寺内陸相が見学に参るからと道庁から連絡ありましたので、全職員は揃つて玄関前に並んで

マベ、ニジマスは新たに第五孵化室の横に養魚池を造り、池のまわりには坂塀を設け、飼料も特に吟味して飼育に当りましたが、一方ザリガニの採取にはまったく苦労しました。

採取地附近に人家の無い所（示された距離は忘れましたが）それに大きな標準も示されていたのです。ご承知のようにザリガニの爪は両方揃つた完全のものは少ないのです。ですから示された数量の数を獲らなければならないことになり本場から十二軒も離れた紋別岳山麓の無名川まで行つた記憶があります。

それだけに無事お届けの終るまでの担当者の方々の苦労は大へんなものでありました。

この時本場には勅使として岡部待従をご差遣になつたのですが、聖旨をご伝えになる室即ち場長室とご昼食に使用の会議室の窓には蠅の入らないように金網を張つたり、また消毒もするのですが、私どもはホルマリンが濃いので窓枠から羽目板まで丹念にこすつたので眼にしむやら、むせるやら、手が荒れるやらで閉口したことが思い出されます。

ご昼食のお給仕には、特に良家の娘さんをとのことで、当時道庁勅任技師であつた中村康次様と奥田病院院長様のお二人のお嬢さんが選ばれ、私はモーニングに白手袋姿で、ご用のあつた時はトレイの前に立ち、手布巾を差上げる役目でありました。

迎えていましたところ、立派な車から体格のよい少將の方が降りて来られたので、先導の方と思い、私が案内し、場長室の階段まで来て、後を振返つて見ますとまだ後の車が来ないので「陸相は未だですか」とその将官にお尋ねますと「エツ、陸相が来られるのか？」と顔色変えて引返し、そのまま車を走らせたのには、私どもはなかなか果然としました。今思い出しても骨稽で堪まりません。

寺内陸相はその直後見えられましたが、当時は未だ中将で赤ら顔の血色のよい、朗らかな、形式ばらないのが印象的でした。構内視察中、日本で最初の飛行機乗りで有名な徳川中将が面会に来られましたが、同じ華族さんのせいか「ヤア」と声をかけられ、同僚のような親しい会話をしておられました。

今考えるとあの当時筆と揮毫帳を用意していたら、よい宝物が出来たのにと残念に存じております。

話は別ですが、私の札幌の家内の実家に、この時宿泊されたのは砲兵監の松井中将でしたが、一筆書いて頂いた「恩無朽」の額は今なお持つて居りますが松井中将は、大分のお年ですからご健在かどうか？

そのほか西越採卵場での千歳川渡河戦に、秩父宮様が偶然にも剣を抜いて、私の数歩前を通られた思い出など話すべきなのですが……。

さて当時、われわれ職員は皆若かつたせい、構内で柔

道や相撲の稽古に体を錬り、はては千歳青年団に試合を申込み、惨敗した想出や、苦小牧まで自転車に乗って浩然の氣を養いに遠征するなど、元氣ハツタるものであつたが、今では白髪、禿頭のご年輩になられていると思うと感正に無量のものがあります。

当時、千歳川ではヤマベはよく釣れたもので、ヤマベ釣大会も全員でよくやりました。品川、岸田、可香谷さんなどがいつも成績抜群のようでした。

中ノ島本場時代

北海道鮭鱒孵化場は、昭和九年四月創設されて従来からの千歳孵化場を充当して来たことは、前にも申し上げましたが、札幌市外中ノ島に新庁舎が十一年十一日に竣工したので、移庁することになりました。

私はこの移転の最初の組でしたが、十二月に入ると車が動かなくなるので、荷物の運搬、庁舎の管理、事務開始の準備などで十一月末雪が降り始めた頃先発として会田庄蔵武田重秀君等と乗込んだのですが、こちらには既に内海重左衛門氏を始め新しい定夫の方々が待機していて私どもと一緒に事務開始の準備を進めました。そして十二月二十一日から事務を開始し、ここに北海道鮭鱒漁業の資源培養と内水面増殖の指導に関する統制本部が、確立されたのです。が、職員の陣容も、庶務係長に江花常与氏を始め池田弥太

たが、この監督は私が当り、業者と五寸あるとかなないとか争つたもので、造園設計には道庁林務課公園係にいた私の中学同期生の羽田正木君にお願いし、植樹の配置や今の本館前の池等のもつぱら同君の指図で完成し、後年の春の桜、秋の紅葉、白樺の名所が誕生したわけであります。

構内のまわりや高台に植えたドイトウヒの苗は、美事に成長し、点々とした緑をたたえているオンコは内海重左衛門氏の庭から運ばれたもので、氏はまたダリヤ、菊造りの名人で、毎日昼食休みに手入れをしていたおだやかな姿が目につかびます。

焼失前の本館を飾っていた二本の蔦（これも内海氏が植えたもの）が本館とともに消え去つたのは長い間の丹精をこめただけに淋しい限りです。

七月十日に挙式された、移庁式典も、お隣りの氣骨者藤乃園主人田沢さんのお骨折りで、盛況であつたことも思い出の一つです。あの時の状況をフィルムに収めたはずですが、どこかにあつたらもう一度見せて貰いたいと痛感します。

最後に私がお仕えた場長は、初代の半田さんと二代目齋藤光雄さんでしたが、いづれも立派な場長さんでありました。

前にも申し述べたように半田場長は私の学窓の大先輩でもあるし、就職の恩人でしたから、親のような気持ちでお

郎氏に加わり、新年度の四月までは主として事務関係に当りました。

四月から事業係長に水試より近藤賢蔵氏が、千歳より岡田、岸田、桜井、升田、江口、原の諸氏が相前後して転勤。女子職員も高畑、川田、田沢、畑の諸嬢が次々と入られてここに賑やかな陣容となつたのであります。

当時構内は敷地が旧河川敷地でありましたため、石がゴロゴロしていて、なんの風情もなく、荒涼たるものでありました。それでも工費約六万円を投じた建物で施設は当時としては立派なものであります。

ところで、最初の思い出は移転早々のこととて浮游池、飼育池が空いておりましたが、本場の附近に製氷業者が数軒あり、それぞれ製氷池で製氷生産にかかつているのを見て、この立派な池を遊ばせておくのもつたないから、私どももやつて見ようという訳で業者のやり方を真似て、やつたところ、案外立派な氷ができたので、孵化室の一隅に貯氷庫をつくり、収めたあと残りをお隣りの藤乃園と今なお残っている精進庵に自慢がてらお分けしたところまではよかつたのですが、意外にもこれがなんと製氷業者の誤解を受け、その筋から呼出しを受け辛い目に会つたのも苦笑の思い出となりました。

次に雪解けを待つて構内の整地にかかり、養魚池の東側の高台から土を運び、五寸厚に客土し、芝生をつくりまして、仕えましたので、なにかと特に面倒をみて頂きました。どこへ行くのにも私がお供役でした。ですから来訪者の接待、会議の時の雑務等はたいがい私があたり、後には口で指図がなくとも、目を見てご用をつとめるようになりました。もつとも半田さんはどちらかというと無口な方で、細かいことは申されん方でしたし、部下を叱るようなことはめつたにありませんでした。それだけ部下もまた氣を使つたものです。

十三年九月七日、半田場長が道の水産課長にご栄転になると同時に、本庁水産課から齋藤光雄さんが二代目場長として見えられました。が、齋藤場長さんも温厚な非常に頭の低い方でした。初代、二代ともお酒の方はいける方で、私はこの方々のお相手をよくさせられました。特に半田さんは酒は強かつたですが、乱れたことはただの一回も見受けませんでした。齋藤さんとは、岡田、江口、私と四人で役所の帰り、誰からともなく誘いをかけてよく出かけたのです。合言葉は「蕎麦を喰べに行きませんか」でした。

数々の思い出がありますが、齋藤場長は十四年八月札幌島へ出張中、不幸病魔に襲われ、ついに九月十五日逝去されました。哀悼に堪えません。

臉をとじればかずかずの思い出は、浮かんで消え、消えては浮びあかかも水底に遊ぶ魚を思わせます。



故 水沢一郎君を憶う

半 田 芳 男

君は数年来病床に親しむようになったことをかねがね痛ましく思つておつた。偶々昨年十一月二十三日大津村に建立された故斎藤兵太郎翁の生前の功績を記念する胸像除幕式に出席した帰り途浦幌病院に入院療養中の君を見舞つたが、久しぶりに会つたところ予想しておつた以上の衰弱状態に接し、長い間の闘病生活の痛ましさを察して暗然としたが、大に元氣付けて恢復を祈つたもののやがて辞去するに当ては何か知ら後髪の引かかる思いをした。それから一週日にして終にくるものがきた。会ってから旬日ならずして茲に人生の最大の悲嘆である死の対面をしては今さら人の生命のはかなさを悲しむ次第である。

君と相識し実に三十有余年。想えば昭和初年の晩春の某日札幌に於て君と初対面したことは今だに記憶に残つておる。それは十勝外四郡鮭鱒養殖水産組合長斎藤兵太郎氏と同道して組合再建の難問題を携えて道庁へ行政折衝にやつ

てきた時であつた。重厚温なる斎藤組合長に配するに白面の水沢青年の発潮たる演出は誠に快調でよくその目的を達したので、これがもとでその後の組合発展の基礎を固めたのであつた。爾来十勝川鮭鱒孵化事業の振興のために、組合長補佐の重責を負いつつ八面六臂の活躍を続け、本邦最大の規模の事業に伸長せしめ、その効果を鮭漁業に反映するに至らしめた功績は実に偉大なるものである。

この外、君は余勢を駆て全道的孵化事業関係団体の設立と運営に寄与した功労も著しい。即孵化事業協会から保護組合へさらに養殖水産組合から鮭鱒漁業協同組合、増殖漁業協同組合、鮭鱒保護協力会連合会との発展途上に於て常に設立発起人としてまた役員として孵化事業振興のための民間人として、第一線に立つて活躍し、鮭漁業の消長は孵化放流数の多少を以て予知し得る確実性を明かにすることができたことは実に君如上の努力に負うところ大きい。

君は晩年病床に親しみ、往年の意氣衰へ嘗ての機略縦横の才といわゆる竹を割つたような何人にも親まるる氣性に接する機会がないことを惜んでいたが、遂に再起することなく茲に幽明を異にするに至つたことは哀悼の千万言をならべてもこれで足りることない。十勝地方としては曩に斎藤兵太郎翁を失ひ、数年ならずして君がその跡を追て他界したことは斯界に於ける大なる損失であるが、後に続く業界各位はよくその偉業を忘るることなく、将来の向上につとめ十勝地方鮭漁業の発展に資せらるることを確信する。最後に君への最も深い印象の思い出を述べるが、君は嘗て本誌鮭鱒彙報に寄せた「十勝川の流れ」なる一文は、平素余り文筆に親しまぬ君としては、実に名文章であると思つておる。この文は君の十勝川鮭鱒孵化事業に対する奮闘史であり、また功績記であつて後進に残すに足るものである。この機会に改めて君の靈前にその寄稿文を具える。君よ今一度この文を読んでくれ給え。恐らく君特有の破顔一笑するであろうことが僕の眼前にホーフツする。君の靈の安泰を切に祈る。

(三六・一二・二記)

故 水沢一郎氏略歴

明治二十八年九月十五日 十勝国大津村字厚内にて出生
大正 二年 小樽商業学校卒業
同 十三年六月 大津村議會議員

昭和 六年四月 十勝外四郡鮭鱒養殖水産組合副組合長
同 十九年三月 大津村漁業会理事
同 二十一年四月 北海道鮭鱒養殖水産組合理事
同 二十二年四月 大津村長
同 二十二年十二月 十勝治水期成同盟会長、北海道治水期成同盟連合会副会長
同 二十五年三月 十勝川鮭鱒保護協力会長
同 二十六年十月 北海道鮭鱒増殖漁業協同組合理事
同 三十年三月 町村合併に伴い大津村長退職
同 三十六年十一月三十日 死去

彙報

○本組合第十回通常総会記事

五月二十日午後一時より水産会館に於て開催された。出席組合員百五十名（組合員現在数二百三十三名）で会議は成立し半田組合長の挨拶（後に要記してある）来賓としてサケ・マス孵化場長及水産孵化場長（次長代理した）の祝辞あつた後、前年度の事業成績報告、決算書の承認、本年度の事業計画並収支計画の承認と以上に附帯する事項の承認等が行なわれ、最後に任期満了となつた理事の選任を了して午後四時半閉会した。

役員の選任は理事二十七名、員外理事一名、当選理事中より組合長を選び総会終了後理事中より副組合長二名、常務理事五名、専務理事一名をまた監事の中より代表監事一名をそれぞれ互選して諸事完了した。

半田組合長の挨拶要旨

昨年五月二十四日天皇、皇后両陛下ご臨席の下に国土緑化大会が支笏湖畔モーラツ山麓に於て行なわれまして、両陛下は植樹行事を終えられて後、札幌市にお出でになりましたが、天皇陛下には翌二十五日に本道の産業、開拓の功労者をお召しになり、それぞれ専門とする事柄につきご

が免れず、捕獲数の多い割合に収入面では十分の成果を挙げ得なかつたし、加ふるに労賃、資材の値上りによる支出増となり、結局収支関係に於て好果を収め得ず、前年度程度の剰余金で終りました。

通観するに本道の孵化事業は年により消長あるにしても概ね年々拡大強化されておるので、回帰漁獲の消長に四年周期を以て反映することは確実となつておることは、今後さらに孵化放流の量的、質的向上につとめ、また孵化事業の効果増進を阻む各種障害の防除を徹底せしむることや、孵化事業実施による受益者の協力を強化することの以上三点を時勢の進展について行くように努力するときは、漁業経営の安定に資することできると信ずるものであります。

最近実現に近づきつつある鮭鱒十億粒（内北海道八億粒）孵化事業は正にこの向上意欲に添うものである。即、この実現のために目下北洋、本州、北海道の受益者が一九となつて強力なる体制を整え、国営孵化事業に於て予算化されない事業、国営孵化事業で実行し難い事項等の代行と必要資金の協力をし、また孵化事業の効果を保証するために必要なる各種の法的整備を行なうことを要請するべく、大日本水産会のお世話になつておる次第であります。従つて本組合といたしましても、この趣旨に同調するために必要な意味で新年度の事業計画を樹てた次第でありますから、

説明を受けられました。不肖図らずもこの内の一人に選ばれる光榮に浴したのみならず、ご進講の内容は特に「北海道のサケ・マス孵化事業について」というので、この問題の選ばれたことは時節柄一しお感激を深めました。しかしこのことは私一人個人の光榮でなく、本組合員は勿論、広くサケ・マス漁業及孵化事業に関係する者一同に頒けるものであると考えるので、この席をかりてご報告した次第であります。

昭和三十六年度の本組合の事業成績については議案によつて具体的にご報告いたしますが、要約すれば昨年のサケの回帰は去る三十二年度採卵にかかる四億六千余万粒を放流したものの中、四年魚が主群となつて回帰したもので、近年にない多数で従つて河川浜上数も多く、殊に太平洋沿岸（特に十勝川）、根室沿岸（特に西別川）がよく、オホーツク海東部之に次ぐ好漁でありました。

本組合の受託捕獲河川は、前述の好漁地区に多くあるのにさらに捕獲場の増設、密漁取締船の整備拡充を行なつたので、捕獲採卵数が増加した。即前年三十五年度に比較すれば捕獲数に於て三一・一%、採卵数に於て五〇・〇%の増でありました。

しかしご承知の通一般的に魚価が安かつた関係もあり、特に採卵充実のため親魚の蓄養を強化したため品質の低下

よろしくご協賛を願います。

最後に一言申添えたいことは、世界のサケ・マス属の資源は北太平洋水域に限られており、これを漁獲利用するいわゆる受益者は、日ソ米加の四カ国であるから、その共通する資源の保全に関しては、各国共同の責任があるものというべきであるから、この四カ国間に於て協調して孵化事業を行なうべきであると思ふものであります。これが行なわれることになれば、兎角毎年難航する各国の漁獲量の配分なども、これを基調として合理的に行なわれることも望めるであらうと思ひます。

昨日の北海タイムス紙にこの度、日ソ漁業交渉を終えて帰朝された高碕政府代表の談話が載つておりました。その中にソ連と日本との「共同の稚魚孵化放流計画を強力に進めることになつた」とありますが、これが実現は前述の北洋に於ける国際孵化事業実施への第一歩となることを念願するものであります。

○水質汚濁防止に関する総会の決議

本総会に於て、石塚正之理事より水質汚濁防止の重要性に徴し、この機会に総会の決議により強力なる運動を展開したいとの緊急動議あり、満場の賛成の下に次の通決議した。

決議

水質汚濁防止に関し、本組合として関係機関と密接な連繫の下に現状の調査と除害施設の完備を促進し、今後の工場施設等については極力排除する運動を展開すると共に、汚濁防止の立法化に努力する。

○本組合役員改選

総会に於て全役員の改選を行い別記（表紙裏面記載）の通当選した。

編輯後記

○最近漁業資源の保全増殖の急務が叫ばれサケ・マスや沿海への魚礁築設等は相当の規模を以て実施する機運になつたことは慶賀すべきことである。就中サケ・マスは従来の沿岸漁業を護る外広く北洋資源をも併せて増殖する計画で、しかもこれに対しては北洋漁業関係者も熱心に協力さるることになつたので時として批判された掠奪漁業の汚名をそぐことになる。

○この時に当り、本号に半田芳男氏の天皇陛下へのご進講「北海道のサケ・マス孵化事業について」を述べた咫尺記の寄稿を得たことは時宜に適したものである。また国民の「銀毛ヤマベの飼育放流の提唱」は比較的等閑視されておる桜鱒の増殖の効率増進策としてまた広田源造氏の孵化場の疎開論等は関係方面の反響を呼ぶものであらう。

○今秋の鮭漁は昭和三十三年度の大量採卵数五億七千万余粒からでた稚魚の大部分が、四年魚として回帰するので河海共豊漁に恵まる見込である。近年の四年周期の回帰が確実となつておるので大に期待しよかる。

（半田記）

昭和三十七年十月二十五日 印刷
昭和三十七年十月三十一日 発行

定価 金 百五十円

札幌市南十四条西一丁目十四番地

編集兼 半田芳男
発行者

電話②二八五〇番

札幌郡手稲町字東中央

印刷所 三陽印刷株式会社

電話④六七五七番

札幌市北三条西七丁目一番地

水産会館内

発行所

北海道鮭鱒増殖
漁業協同組合

電話代表④〇二六一番

鮭 鱒 報 第五十九号

昭和三十七年十月三十一日